

QEI 第一回特別総合講座を終えて

山形大学人文学部准教授 山田圭一

先日は久しぶりに QEI の高校生（一部大学生もいましたが）対象に授業ができて、とても楽しかったです。QEI 一期生から五期生までそれぞれの年代のメンバーが参加してくれて、なかなか感慨深いものがありました。当日来られなかったけれど回答メールで参加してくれた人も含めて、どうもありがとうございました。ただ、思ったよりも人数が多くて講義形式の授業に変更したのと、たくさん話をしたいことがあって少し急ぎ足で説明しすぎたのと、ちょっと難しい話になってしまったかなあと反省しております（もしも次回があったら、もう少しハードルを下げます…）。でも大学の授業というのは一般的に「こちららの話についてこい！ついて来られなかった自分で勉強してついてこられるようにしろ！！」という傲慢な姿勢で行われるものなので（笑）、そういう大学の授業の模擬授業ということでご容赦ください。

それで最後に回収させていただいたみなさんの回答がとても面白かったので、以下に少しだけ感想と補足を述べさせていただきます。

Q1、あなたは歴史を学ぶ必要があると思いますか？

Yes 派

<多数意見>

- ① 過去の成功や過ちを学んで、これからの行動に生かすことができるから（13人）
- ② 偉人を知ること、「こんな風に生きたい」という目標がつかれるから。（4人）

<その他の回答>

- ・ 自分の先祖や今存在しているものの過去や成り立ちを知りたい、というのは人間の性（さが）だから。
- ・ 理科も科学史を学んでいることであり、学びそのものが「歴史を学ぶ」ことに等しいから
- ・ ロマンを感じるから
- ・ 国民や民族としての共通意識をつくるため
- ・ 自分を形成しているものの一部を知る
- ・ 歴史の法則を知る必要があるから

No 派

- ・ 過去を未来に生かすということはできるかもしれないが、同じ人物が生きているわけではないので、それに頼りすぎると危険。

元歴史研究会会員としては、どの回答も「うんうんそうだよなあ」と心の中でうなづきながら読ませていただきました。たとえば、自分の生き方のモデルをつくる(②)というのはとても重要で、深刻な問題にぶち当たったときに「あの人だったら、こういう場合にどう考えて、どう行動するだろうか」という指針を与えてくれる人物をつくっておくことは、人生にとって大切なことだと思います。もちろんそのモデルは身近な人でもよいのですが、心の底から畏敬の念をいだくことができる対象となると、やはり時間のふるいにかかけられて今に語り継がれている人物がその有力な候補になるのではないかと思います(ちなみに私の場合は、思考のモデルがウィトゲンシュタインで、行動のモデルが吉田松陰です)。

ただ今回はあくまでも「哲学的」に興味深いところに論点を絞って、少し補足させていただきます。

今回の回答では「過去の失敗を今後繰り返さないため」という回答(①)が圧倒的に多かったですね。この回答は講義で説明したように歴史におけるゆるやかな法則性や同型性が成立する、という立場をある程度前提としていると思います。でも、過去と現在とは同じ人物ではないので、それに頼りすぎると危険、という唯一の反対意見はとても面白い意見でしたね。

私は、歴史的時間と物理的時間との違いを、歴史的時間は一回限りなのに対して、物理的時間はそうではない、という点にあると考えています。たとえば物理学が探究する事実は、いついかなるときにも成り立つ事実なので、昨日リンゴが落ちたという事実と今日リンゴが落ちたという事実とが物理状態として同じであれば、物理的視点から見ると両者の事実の間に区別はありません。でも当然歴史的な視点で見れば、仮に物理的にはまったく同じ事実が起こったとしても、昨日の出来事と今日の出来事は区別されます。このいみで、歴史的事実は、その内容にかかわらず、原理的に一回きりしか起こりえない、ということになります。そして一回きりだからこそ、過去に起こったことはもう絶対に変更不可能だということになり、「過去はどうやっても取り返しが付かない」ということになるだと思います。

そしてこの絶対的な一回性を引き受けることによって、「過去はどうしても変更不可能だから、せめて現在(そして未来)だけでも間違いを修正して、よい方向に変えていこう」というみなさんの回答につながっていくのではないかなあ、と思いました。

Q2、あなたは歴史的出来事(たとえば、「信長は本当に本能寺で死んだのか?」)について本当の真実を知ることができると思いますか?

No派

<複数意見>

① 文献を書いた人の主観が入ったり、都合のよいように書き換えられているかもしれないから。(5人)

- ② 実際に自分で見たわけではないから。(5人)
- ③ 他人が語り継いできたものだから。(3人)
- ④ 残されているものが本当に正しいかどうかわからないから。(2人)
- ⑤ 真実が分からないからこそ、想像していく面白さがある(2人)
- ⑥ タイムマシンがないと真実はわからない(2人)。

<その他の回答>

- ・真実は当事者しかわからない
- ・資料に合わせて、都合よくつくられるから
- ・どんな証拠があっても正しいとは限らない。たとえ、一分前の出来事であっても。

こちらの話は時間切れで扱えなかったですが、全員 No 派になるとは思っていなかったの
で、少し驚きました。みなさん、なかなか懐疑的な精神が身についていますね(笑)。

みなさんの回答をまとめてみると、だいたい以下のようになると思います。

過去の事実についての文章を書き残した人が本当のことを書いているかわからない(①)
し、人から人へ伝え継いできた話は本当かどうかわからない(③)し、自分でそれを実際
に見たわけではない(②)ので、歴史の真実はわからないのだ、と。

これは確かに一見すると、「なるほど」という気がします。でもわれわれは現在の事実について、
他人が書いた文章(本や新聞)を読んだり、他人から話を聞いたりして、自分で実際に見たこと
ない事柄についても知識を得ているわけですね。だとすれば、過去の事実を知ることの困難
さと、現在の事実を知ることの困難さとの間に決定的な違いはあるのでしょうか。

おそらくこの問いに対する答えは、現在の事実に関してはそうしようと思えば自分で見て
確認することが不可能ではないのに対して、過去の事実に関してはどう頑張ってもそれが不可
能だ、という点にあるのだと思います。これは先の Q1 に出てきた「過去の一回性」に関
連する事柄です。過去の世界は、すでに過ぎ去ってしまっているものでどこにも存在して
いません。存在しているのは常に現在の世界だけです。したがって、われわれはどれだ
け頑張っても現在の世界しか見ることができないのです(われわれが見ることができるの
は、過去の人物が写った「現在」の写真にすぎないのです)。

この点で、過去の事実を知ることの難しさは、現在の事実(たとえば、ある政治家が本
当に汚職をしているかどうか)を知ることの難しさとは次元の異なる難しさだということ
が理解していただけるかと思います。

しかしそれを踏まえて、天邪鬼な私は、あえてやはりこう問うてみたくなります。それ
では、われわれは自分で見ることでできるものについてしか真実を知ることができないの
だろうか、と。もしもこの問いに Yes と答えるならば、われわれは学校で習った(あるい

はこれから習う) 電子や素粒子 (クォークなど) が存在するという事も知ることができないことになります。というのも、われわれはどんなに頑張っても電子そのものや素粒子そのものを見ることはできないからです。われわれが見ることができるのは、せいぜい真空放電管の中に生じる「影」や霧箱の中に生じる「線」なのであって、われわれは科学理論をもとにしてそれを「電子」や「素粒子」の跡と見なしているにすぎません。つまり、電子や素粒子は、「そういう存在を仮定すると色々な現象がうまく説明できる」という理由でその存在が仮定されている仮説的な対象に他ならないのです。

そしてこの説明構造は、歴史的事実に関しても当てはまります。われわれは過去そのものを見ることはできないわけですが、「信長が本能寺の変で死んだ」という仮説を立てるとその他の歴史的事実がとてもうまく説明できます。そして反対の仮説を立てると、その他の歴史的事実と色々なところで矛盾が出てきてしまいます (たとえば、信長が生きていたのに、なぜ彼の家臣たちが信長のもとに再び集まらなかったのか、などなど)。つまり、「直接見ることはできないけれど、それを仮定すると他の現象がうまく説明できる」という点で、「電子や素粒子が存在する」という事実の証明の仕方と「信長が本能寺の変で死んだ」という事実の証明の仕方との間に本質的な違いはありません。したがって、もしも前者のような科学的事実について本当のことを知ることができると考えるのであれば、歴史的事実についても本当のことを知ることができると言ってよいように思われます。

以上のように考えていけば、Q2についての答えは、みなさんの答えに反して Yes ということになります。どうですか。納得できましたか。うん、納得できなくてうずうずしている顔が目につかびます (笑)。以上の話はすでにかなり本格的な哲学の話に入ってきているのですが、もしも何か反論なり、ご意見なりがあったらぜひ私のアドレス (kyamada@human.kj.yamagata-u.ac.jp) にメールで送ってください。

ではでは、またの機会にみなさんとお会いして、今度はもう少し議論できることを楽しみにしております。今回は楽しい時間をどうもありがとうございました。